第十二回　「チェルノブイリで感じたこと、考えたこと」

岡部　芳彦

チェルノブイル原発4号炉、通称「石棺」の前で。

今年、ウクライナ各地では3月としては130年のぶりの大雪が降りました。交通が完全に麻痺し、首都キエフの中心でも車が走ることが出来ず、そのまま放置されており、ウクライナ政府が非常事態を宣言するほどです。

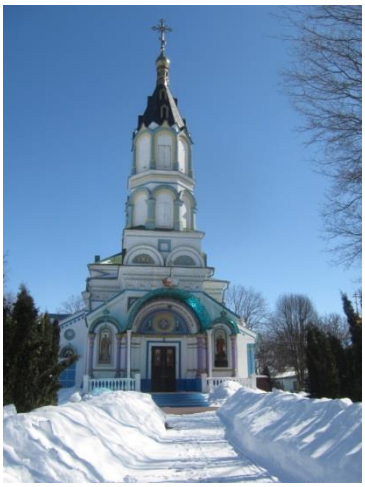
最初はちょうど大雪が降った日で断念しましたが、ウクライナを離れる前日に何とかチェルノブイリまで来ることができました。当日は3月とは思えないほど寒く、着てきた春用のコートが全く役に立たないので、ウクライナ非常事態省（MHC）の防寒着をお借りしました。

チェルノブイリ原子力発電所はウクライナの首都キエフから約130km北にあります。1986年4月26日1時23分に休止中の４号炉で外部電源喪失を想定した実験中に制御不能となり爆発しました。僕は、決して巧くはありませんがロシア語を使えば直接ご意見がうかがえるので、ウクライナに来るたび、機会があればいろんな方にその後の影響についてお聞きしてきました。被害が甚大という意見も多くある一方、その後のソ連崩壊による生活環境の激変やそれによるストレスやアルコールの過剰摂取による死亡率の増大のほうが被害が大きいといった意見までさまざまで、はっきりしたことは未だによく分からないというお答えが多いです。

モンゴル馬の群れ。
寒すぎるせいかあまり動きません。

ウクライナと関係がある仕事をしていると分かると、必ず聞かれることの一つがこのチェルノブイリ原子力発電所事故についてです。ウクライナの方でもよく分からないことも多いとのことなので、同じく原子力災害の経験を共有する国の国民としては一度この目で見ておきたいと以前から思っていました。

現地へ向かう途中、意外に思えたのは、事故後避難を余儀なくされ、その結果現在は人が少ないせいか自然環境が非常に豊かなことです。野生のモンゴル馬がたたずんでいたり、チェルノブイリ原発沿いの川には白鳥がいたりとここが事故の現場付近だと知らなければ、のどかな田園風景がつづきます。



美しい教会でした。

現在原発関連で働く人たちの拠点であるチェルノブイリ市には美しい教会があります。あまり知られていませんがチェルノブイリ自体はもともと原発都市ではなく、1193 年ぐらいから所在する非常に歴史のある町です。この教会は今では毎日曜日にはミサも行われるようになり、結婚式をあげるカップルもいるそうです。

町の中心には、事故で避難を余儀なくされた村々の名称のプレートが

折り鶴のモニュメント。

並べられ、その一番奥には、フクシマ・ヒロシマの名前が冠された折り鶴のモニュメントがあります。ここにはもう一つ意義深い記念碑があります。それは事故の収束作業にあたった人々のもので、「誰が世界を救ったか、彼らだ」と刻まれています。これもはっきりした数字が分かりませんが、事故直後、多くの消防隊員や軍人が放射線量が分からぬ状況のまま、原発内で消火や事故収束作業に従事し、その内の少なからずの方が急性放射線障害でお亡くなりになったと言われています。彼らの働きがあったからこそ、被害の拡大が防げたのだと感じました。このモニュメントは市民の寄付金のみで建てられたことからも人々の畏敬の念がうかがえました。

「誰が世界を救ったか、彼らだ。」

空間線量計で計っただけですが、原発から 700m でも線量が 0.3 マイクロシーベルトで、意外にもコンクリートで覆われた「石棺」と呼ばれる 4 号炉の周辺以外は線量が低いか自然放射線と同じぐらいの値です。5 回以上に渡り徹底して人が通るところだけ集中除染したからだそうです。4 号炉「石棺」の前まで近づいたところ線量が一時間あたり 2.5 マイクロシーベルトと自然放射線の約 25 倍とまだ高い値です。ただこれでも春夏よりは線量が低いとのことです。一つの発見は雪が降ると地表が覆われ線量が低くなることでした。石棺も老朽化が進んでおり、国際プロジェクトとして建造される石棺の上をさらに覆うドーム状の構造物もだいぶ完成していました。

石棺の前はまだ高い線量です。

石棺を覆うドーム状の構造物

原発からわずか 4km の町プリピャチ。町の中心まで 4km で町の入口と原発までは 2km しかなく思っていたよりもすごく近く感じます。今は廃墟と化していますが、当時は約 5 万人が居住していました。建物もきれいで、集合住宅はエレベーターが備えられホテルや娯楽施設も多く、一見して生活水準が非常に高かったことが分かります。ここに住んでいた原子力関係の労働者はソ連ではエリートでした。事故が起こったあとも一切知らされず、30 時間経ってやっと避難が始まりましたが、パニックを避けるため 3 日で戻れると説明を受けたため家財道具やお金まで置いていっ

廃墟となったプリピャチのホテル

た人がいたそうです。

プリピャチのシンボルとも言える観覧車。遊園地は開園しましたが観覧車が稼働する前に事故が起こり誰も乗ることはなかったそうです。小学校の食堂の床には子供用のガスマスクが散乱していました。壁にポスターが貼ってあり、ソ連時代の教育はロシア語だったので読むことができ以下のように書いてありました。「原子力は（人に）暖かい。そして未来も明るい」。廊下を歩いていると、子供たちが楽しげに遊ぶ声が今にも聞こえてきそうな気がしました。

キエフに戻ってくると友人からウクライナの西隣の国モルドバ産の赤ワイン２リットルのボトルを渡されました。明日帰るのにこんな重いものは預け荷物の重量オーバーで持って帰れないと言うと、「明日までに全部飲むんだ」と言われました。さすがに飲みきれないとビックリしていると、ウクライナでは赤ワインのポリフェノールが放射線に効くとの都市伝説を信じている人がいるそうです。もちろん友人はこの話を信じていませんが、僕の体を気遣ってのことで、ウクライナでの最後の晩ということもあり、有り難くいただきました。

４回にわたり、書かせていただいたウクライナ・シリーズは今回で終わりです。次回からはイギリスのお話に戻ります。日々の暮らしのこと、研究のことについても書かせていただきますので、またこのコラムのウェブサイトをご訪問いただければ幸いです。

誰も乗ることがなかった観覧車

学校の床に散乱する子供用ガスマスク

「原子力は暖かい。そして未来も明るい」

学校の廊下で。子供たちの声が今にも聞こえてきそうです。